

2022年度 学校関係者評価委員会の報告書

1. 目的：学校評価を通じた組織的、継続的な教育活動の改善
地域連携・協力による特色のある学校づくりの推進
2. 内容：学校の教職員が学校の理念、目標に照らして自ら教育活動について
行った評価結果を基本として評価を行う・
3. メンバー
事務局（遠藤学校長・清水副会長・渡邊担当理事・大澤事務局長・池田副学校長）
実習施設（3施設）一看護局長（部長）
久米田看護専門学校一副学校長
同窓会会長（卒業生代表）
4. 今年度の実施状況
第1回目—5月18日（水）
2021年度学校関係者評価委員会の報告書（HP掲載）
1年の流れ「学校の年間スケジュール」
国家試験対策
卒業生のアンケート結果
今年度の重点目標
第2回目—9月21日（水）
今年度の自己点検自己評価について
新型コロナウイルス感染拡大による看護基礎教育の現状報告
学生の状況
各施設の新人スタッフの現状
第3回目—2月15日（水）
今年度の自己点検自己評価結果
次年度に向けての課題
国家試験終了後の学生の状況
5. まとめ
まずは今年度の取り組みについて
①第1回目の内容では国家試験対策として学習支援計画について説明した。
学生と共に国家試験合格100%を目指すこと
学生自身にその覚悟と自分の学習だという意識が必要、やってもらって教えてもらって当たり前にならないこと。
自分で力がついたという学習ができるようにしたい。
 - ・カリキュラムと関連させながら知識が定着するにはどうするかのを学習支援の学生がクラスにおろし、どうしていくかも考慮し、学習教員と計画を立てた。
 - ・1年生は一番弱い解剖生理の理解を重点的に行う。
 - ・2年生は病態生理学の理解に重点を置き、必修問題の到達度を上げていく。後半の授業で各領域の看護の授業と関連させ状況設定の理解に努める。
 - ・3年生は国家試験本番に向けて、確認テストを取り入れつつ弱いところのホロー講義および業者模試を取り入れていく。

1月には模試の結果の低い学生に関しては特別講習で学習が深められるよう努めた。

- ②卒業生のアンケートについては、規則についての厳しさを指摘されたが、本校は学生を大人として扱い、職業人としての倫理観をしっかりと教育したいと考えている。

学生の気持ちも考慮したうえで、理解できるような関わりを強化したい。

- ③重点目標に関しては、新カリ、旧カリの混在していることなども含め、自己評価の見直しができるよう重点目標を掲げず、全項目について考えることとした。
- ④教育理念・目的・人材育成は前期の評価は昨年より上がっているが、前期と比べて後期の評価が下がっている。

この理由として

- ・後半、実習途中でリタイアする者、実習成績が不良で次年度の学習に切り替えた者が3年生から2人出ていること、未修得科目生が再度未修得科目になって者や保護者対応に追われたことによると考える。
- ・社会生活上のルール、交通マナーなどが守られていないと近隣からの苦情があった。
- ・2年生の授業態度が悪いとの非常勤講師からの指摘が多くあった。
(居眠り、私語等)
- ・遅刻早退、欠席が1年生に多くいること

以上のことなどから、看護基礎教育が求めていることと学生のギャップを感じている。

社会生活において、学生だけでなく保護者も含め予想以上の教育的関わりが必要になってきている。

- ⑤教育活動については、国家試験対策（学習支援）の内容を各学年すすめ、後半に教員及び学生が学習効果の感触を感じ始めている結果、後期は少し上昇したと考える。

- ⑥卒業生の就職状況（34名の卒業）

岸和田市内 — 20名（実習施設への就職）

その他の泉州地域— 8名

泉佐野 — 1名

和泉市 — 4名

堺 — 3名

大阪市内— 1名

※5名の不合格者3名は岸和田市内（就職先）の病院、2名は大阪府内の病院で看護助手として働きながら次年度の国家試験対策を行っていく予定。

- ⑦卒業生の社会評価・学習支援

- ・1期生は2年が過ぎ3年目に入る、2期生は社会人1年生としてどうであったかを確認するため学内で同窓会を開催し近況報告会を行った。
- ・1期生は3年目に意欲をもって頑張ろうとする者が大半であるが、2～3名は急性期看護に向いていないと転職を考えていた。
- ・2期生はメンタルが理由で早期退職した者が昨年より多かった。
- ・今年の卒業生の多くは実習施設に就職していることもあり、早期退職者を出さないように施設との連携を強化したい。

- ⑧教育環境として

ICT教育の強化から、インターネット環境を、整え実施できる取り組みは継続できている。

外部講師の協力により、学生のスキルアップにつながっていること、教員も学生には及ばないがスキル向上のために昨年より努力している。
建物の老朽化に対しては、学生の安全面も考えメンテナンス体制の整備が必要である。

⑨学校関係者評価委員会での委員から

- ・昨年度と比較して少しは実習受け入れができるよう調整はした。
しかし、まだまだコロナ禍で、実習受け入れが思うように行かなかったこともあった。
卒後、臨床とのギャップに悩まされる新人が多いこと、またメンタルの弱さは今年度も引き続き感じている。
ギャップを埋めるためにどのように関わっていくかが、指導者側に問われている。
- ・学生のアルバイトも現場がイメージできるように、病院や医院の看護助手や老健施設などを選び学生が増加している。
- ・昨年同様コロナ禍により危機管理として災害教育などに目を向けることができていない。
今年度、地域に協力して頂ながら、災害を想定した安全管理対策についての学習ができればと考えている。
- ・学生の質向上のためには現場との協力が何よりも大切である。
1年次にしっかり学生と関わることで、3年次の実習では学生が主体的に学習ができる力を発揮できるようにしたい。
実習施設との共有、協力で学生だけでなく、教員及び指導者の質の向上につなげたいと考えている。